

島袋寛盛：日本藻類学会第28回大会参加記

日本藻類学会第28回大会が、2004年3月27日から29日に、札幌の北海道大学で開催されました。私はこの機会を利用して、北海道大学大学院理学研究科植物標本庫（SAP）でホンダワラ属の標本を調査するために、まだ多くの雪が残る北大理学部に、学会の5日前から訪問させていただきました。実験室で標本を観察している間も、北大のスタッフや学生の皆さんは間近に迫った学会の準備に追われ、とても忙しそうにされていました。私も会場で販売するキーホルダーなど学会グッズの作製やプロジェクターの調整など、微力ではありますが準備作業に加えていただき、主催者側のみなさんと打ち解けた楽しい時間を過ごすことができました。

27日の評議委員会によって藻類学会がスタートし、翌28日からは、いつものようにA・Bの2会場に分かれて口頭発表が行われました。A会場のトップバッターとして、ホンダワラ属の内部組織構造について発表する予定だった私は、緊張しながらホテルを经ちました。朝の風はひんやりと清々しく、訪れた時よりも遙かに減った雪に春を感じながら、足早に会場に向かいました。会場入りすると、大型藻類がメインであるA会場は、階段式の大きな会場であり、発表画面も大きくとても見やすいものでした。私はずっとA会場で発表を聴いていました。学会発表の内容はその年の研究の流れを反映しており、分子生物学的手法を用いた発表が多かった昨年に比べ、今年のテーマは多岐にわたり、特に海洋深層水を用いた研究発表がされたことも、その年の流れをよく表していると感じました。

口頭発表後、夕方からA会場で総会が行われました。会計や学会員名簿作成等の事業報告が行われました。その中で、外国人のレフリーを増やしたことによってPhycological Researchへの海外からの投稿が増えたことや、Institute for Scientific Information (ISI) に加わるための計画などが発表され、日本藻類学会への国際的な期待が高まっていくのを感じました。また再来年(2006)の日本藻類学会第30回大会が鹿児島大学で開催されることが承認されましたが、30回を記念する大会が鹿児島で行われることに、私自身も身の引き



ポスター発表会場

締まる思いがしました。

総会終了後、学内の食堂で懇親会が行われました。例年通り、立食形式のパーティーで、北海道ならではの食材を使った数々の料理と、北国のおいしいお酒に、参加者一同十分に堪能し、準備をされた主催者に感謝した次第でした。この懇親会の席では、諸先生方や友人と一年ぶりの挨拶をしたり、新たな出会いを得たりと、有意義な時間を過ごしました。その後、学外の居酒屋で北大の学生諸氏が中心となり、「若手の会」が開かれ、学生や若い世代の研究者がたくさん集まりました。毎年のことですが、この会では世代の近い者同士で、懇親会とはまたひと味違った交流と情報交換ができました。

翌29日の口頭発表も順調に進行し、昼前の1時間には30題のポスター発表が行われました。会場はそれぞれA、Bの口頭発表会場につながるオープンスペースで行われ、天井も高く、向かい合うポスター掲示板の距離も3m近くもあり、比較的余裕をもって見ることができました。今回は、パソコン上でレイアウトしたポスターをそのまま1枚の大きな紙にプリントしたものも多く見られ、発表内容はもちろんのこと、ポスターとしてのデザイン性も、年々向上しているようです。

学会プログラムの最後に、「北海道におけるコンブ研究の現状とその問題点」というテーマで、公開シンポジウムが開かれました。主に鹿児島を中心とした南の海をフィールドにしている私にとって、天然で生育するコンブを見たことはなく、憧れにも似た気持ちで、講演に聴き入っていました。コンブは日本にとって重要な海産物の一つであり、その長い研究の歴史を実感しました。コンブは生育環境によって形質が変異し、似たような形態でも、生育地によって種名が変わるなど、種の同定が比較的困難なことや、近年は流水があまり来ないために基質上の雑海藻が除去されずに新規の加入が妨げられ、結果的にコンブ資源が減少している話など、興味深く聴かせて頂きました。鹿児島の種子島でも、台風が来ないことによって基質の岩が動かず、ホンダワラ属藻類が同様に減っているのではないかという話があり、大型藻の新規加入には、物理的な接触による基質の更新が関わっていることを、



口頭発表会場

改めて感じました。

翌30日からは室蘭で行われたワークショップに参加しました。実習の合間に、冷たい小雨が降る中、実験場裏の浜で海藻採集を行う機会を得ました。鹿児島とのあまりの海藻相の違いに、日本列島の南北の長さを実感しました。こちらのワークショップについては他の方が執筆して下さるということで、詳しくはそちらへお任せします。

今回の札幌大会は、参加者が200人を超えた盛大なものであり、私もすべての日程に参加することができました。このような立派な大会を開催されたのも、運営されたスタッフの方々の多大なご苦労があればのことと感じています。

2005年は京都大学で藻類学会が行われます。また3月に皆様にお目にかかれることを楽しみにしております。

(鹿児島大学大学院)



懇親会

佐藤康子：日本藻類学会第28回大会公開シンポジウム「北海道におけるコンブ研究の現状とその問題点」参加記

去る3月29日に北海道大学学術交流センターにおいて開催された日本藻類学会第28回大会公開シンポジウム「北海道におけるコンブ研究の現状とその問題点」に参加しました。

コンブという身近な海藻がテーマであったため関心が高く、シンポジウムには藻類学会会員のほかに、海藻の利用や環境を専門とされている研究者、漁業団体、流通関連などコンブ産業に携わっておられる方々に加え、一般市民の来聴も多く、約170名が出席されました。

松山恵二氏(北海道立函館水産試験場)のご挨拶に次いで、四ツ倉典滋氏(北海道大学)「コンブの多様性—個性豊かな海中の森の主役たち—」、坂西芳彦氏(北海道区水産研究所)「コンブの生理生態学—コンブの御飯は光—」、名知進一氏(北海道立釧路水産試験場)「コンブ減産の現状とその要因—流水・磯焼けとの関連—」、西澤信氏(東京農業大学)「コンブは食物繊維の宝庫—コンブから生まれた機能性食品—」の4題の講演がなされました。いずれも最新の研究成果についての話題であり、青森県の機関で海藻増養殖技術開発に取り組んでいる私としても、興味深く拝聴させていただきました。

四ツ倉さんは、分子系統解析によるコンブ類の多様性研究についてお話してくださいました。北海道沿岸のコンブ類は、コンブ属のタイプ種となっている *Laminaria digitata* とは遺伝的に離れており、日本近海の狭い範囲で多様化している固有種であるとお話を聞き、日本産コンブ類の遺伝資源保存の重要性を改めて認識しました。また、輸入コンブとの差別化を図るためにも育種が必要であるということも分かりやすく説明していただき、育種について考える機会を得ることができました。青森県でも津軽海峡、太平洋沿岸のコンブ養殖産地で養殖手法の検討を行ってききましたが、これまで優良系統品種を得るに至っておりません。今後の養殖漁業において育種によるブランド化の必要性を強く感じたところです。

坂西さんの講演は、コンブ類の生育場所の光環境についてのお話でした。北海道東部太平洋のコンブ類生育場所の水中光量子量を調査し、コンブ目植物の生育限界との関係について説明してくださいました。水中光環境の研究は、日射量によるコンブ生産予測、海岸構造物の形状研究、海藻類の生態の解明など幅広く応用され得るものであるとの内容でした。これからは、天然マコンブ生産予測などにおいて、日射量を考慮する必要があると思いました。

名知さんは、ナガコンブ地帯とリシリコンブ地帯におけるコンブ減産状況とその要因についてお話してくださいました。コンブの減産には、水温、競合海藻、植食生物、堆積物など、沿岸域の生態系全体が複合的に作用しているため、多方面に渡る調査によって各地先の現状を正確に把握することが重要です。その上で、的確でかつ現実的な対策を開発しなくてはなりません。さらに、コンブ生産予測には、時化や日照といった気象要因、就業者数や需要などの社会、経済的要因も勘案し、それらを一つの体系として扱う必要があることがわかりました。どれも難しい課題ですが、今後、私たちが取り組むべき方向を示して頂いたものと感じた次第です。

西澤さんは、コンブに含まれる食物繊維であるアルギン酸、フコイダンの機能性について説明してくださいました。低分子化アルギン酸ナトリウムの開発により、コンブの豊富な食物繊維を特定保健用食品という形で有効に利用し、製品化された商品を紹介してくださいました。商品名は知っていたのですが、原料がコンブとは知らず、コンブの食品としての優れた機能性を再認識することになりました。特に、仮根には葉状部と異なり、2種類のフコイダンが含まれ、仮根を利用した食品素材を開発されたことが印象に残りました。未利用部分の有効利用は、環境問題だけでなく、コンブ漁業にとっても有益であると感じました。